

特集①「いじめ」「不登校」「ひきもり」横湯園子文学部教授に聞く

「悩める子供と向き合って40年」 「研究者というより実務家です」

不登校、いじめ、虐待など、困難を抱える子どもや青年と向き合って40年。

カウンセリングも行う臨床心理士であり、

教育臨床心理学の研究者として活躍される横湯園子・文学部心理学専攻教授。

フジテレビ『江原啓之&嵐 現代人の悩みを救え！緊急生放送スペシャル!!〜明日への扉〜』、

NHK教育テレビ『ひきこもりからの出発〜青年とカウンセラーの対話〜』。

現代人の抱える困難をターゲットにした番組に相次いで

出演されたということで、お話をうかがった。

学生記者 八並恵理子(法学部3年)

突然の出演依頼
「嵐」って？ 1ヶ月必死で研究

『明日への扉』は、人気ジャニーズグループの『嵐』と『オーラの泉』などで話題のスピリチュアリスト・江原啓之さんが組み、FAXや電話で日本全国から寄せられた悩み相談を生放送で解決に導き、日本を元気にするというもので、第1部と第2部の二部構成で合わせて4時間半にも渡る

生放送番組だ。横湯教授が出演したのは第1部、

第2部で、専門家としてコメンテーターを務めた。

「突然、フジテレビから出演依頼のファックス

が来たんですよ。実は私、『嵐』が誰かわからなくて。

ファックス見ると、出演者のところに『嵐』とし

か書いてなくて、『下の名前なんとおっしゃるん

ですか?』と聞いたら『ジャニーズです』といわ

れたので、『ジャニーズ嵐』っていう名前のハー

フの方なのかなって思ってしまいました」と言っ

てコロコロと笑う。

そういうわけで出演のための一番の下準備は

『嵐』研究だったそうだ。「いっしょに番組に出

る人がどういう人か知らない、話せませんから

ね」と、『嵐』のメンバーが出演するドラマ『花

より男子』、『拝啓、父上様』を必死で1ヶ月ほど

見て、他の人は雑誌で追いかけて、どういう趣味で、

何を集めるか、など全部暗記していった。

「自殺を考えたことがある」

少年少女の4人に1人が回答

「生きていく意味がないんですが、どうすればいいですか?」

10代の若者1000人にアンケートをとった

結果がモニターに映し出される。「自殺を考えた

ことがある」と答えた人は26・1%に上った。

「ええー」「自分が小中学生の時はそんなこと考

えてなかった」。そんな声がスタジオ内である。

『嵐』のメンバー、二宮和也くんが「びっくり

ですよ。この数字、横湯さんどうなんですか?」

と振る。横湯教授は「実際にはもっと多いと思う

んです。アンケートに反応される人はまだ元気な

人だと思っので。具体的に死を考えていたり、い

じめられて自殺を本気で考えている人はアンケー



「ジャニーズ嵐」という人？かと…

重いケースの相談も入ってくる。自閉症の子供をもつ家庭からの相談だった。途中で、江原さんは親に向かって、いきなり「あなた少女時代苦労されましたね」と言った。

「そんなの私たちには見えませんよ。私たちは何回も接していくうちに、信頼関係ができれば話してくれるようになりますが、江原さんはすごいなあって思いました。私たちの見えないものを見てしまうので、楽しいいなあって（笑）」

青年は、高校を卒業後、大学に入学したが、周囲に全く馴染めず退学。北海道の実家に戻ると「ひきこもり」が始まった。転機が訪れたのは4年もの歳月が流れた26歳の時。北海道大学教育学部の相談室を訪れ、カウンセラーの横湯教授と出会ったのだ。二人は、2週間に一度のカウンセリングを重ねていく。その中で、いじめ体験、両親との葛藤など、ひきこもりの原因が少しずつ浮かび上がっていった。そして、当時、横湯教授が関わっていた虐待防止協会のボランティア活動に参加することをきっかけに、一步一步人とのつながりを取り戻し、外の世界に出ることができるようになった。

現在は、札幌市内の障害者施設で働いている青

トに感じないですよ。そう考えますと、この数字よりも少し多いように思います。」と応じる。

番組は、『嵐』と江原さんがFAX、電話で受け付けた悩みについて話し合い、専門家として弁護士、精神科医、横湯教授たちがサポートするようになして進んでいった。

「15時半から生放送で、11時から打ち合わせでした。特に『いじめ』については嵐のみなさんがとても真剣に考え、意見を出していました。私は

私でこういうこと語りたい、というところ、江原さんもじゃあ僕もこういうことについて語りたい、というように。『いじめ』にからめて、教育や自殺の問題もやりたいと言っていたんですが、そんなところまで広げられませんか、いっそもう一度番組組みたい、と言うほどでした」

「嵐」のメンバーたちは第1部には出番がないため、その間もずっと打ち合わせをしていたそう。まさに、みんなであげていく番組だった。

5年に及ぶカウンセリング ひきこもり青年との再会

続いてもうひとつのテレビ出演、NHK教育『ひきこもりからの出発』の話を聞いた。この番組はあるひきこもりの青年と横湯教授の5年弱にも及ぶカウンセリングの記録と社会復帰した彼を追うドキュメント。横湯教授が7年ぶりに青年を訪ね、久しぶりに再会した二人に密着する、という番組だった。



「恩師はいません。全部独学ですね」と横湯教授

年を横湯教授がたずねる。

「番組自体は30分くらいなだけで、5日間取材。現在についての語り会いは4時間くらい撮影しました。全員がお昼食べる間もなく、カメラ回りっぱなし。でも誰もおなかはずきませんでした。私も彼も語ることがたくさんあって、放映はされませんでした。あの時間は不思議な時間でしたね」

ボランティア紹介が転機に 欲しいスモールステップ

反応はすごかった。特にひきこもりの当事者からの電話が全国各地からかかってきたという。教

授ひとりでは手に余るほどだった。特に反響が大きかったのは、青年がひきこもりから脱することになるきっかけとなる虐待防止協会でのボランティアについてであった。「彼らは外に出たいんだけど、出れないんです。治療機関に通っているけど、ほんとに社会に出るためには今のままではだめだと思っている。青年が社会にできるきっかけとなったボランティアの

ような小さなきっかけ、社会につながっていくスモールステップが欲しいんです。そのような場所を紹介して欲しいという電話もたくさん受けました」

虐待防止協会でのボランティアは、当時教授がたまたま関わっていたため紹介できた。防止協会にはソーシャルワーカー、臨床心理士、精神科医、弁護士といった人たちがいるため、ひきこもり青年への理解も深く、自然な雰囲気を受け入れることもできた。しかし現在の日本でそのようなスモールステップとなるような場所はなかなかないのが現状だという。

「なんとかそういう場所つくれないかというこ

とで、行政でも取り組んでいるんですが、どうしてもデイケア的なものになってしまってますね。彼らはプライドが高い。「僕は病人じゃない、ただ外に出れないだけ」と言います」

自分が何か社会と関わり、役に立ってる場所。一方で急に外に出ることはできないので、社会に居るためのクッションのような場所。ひきこもりの人たちが欲しているのはまさにそういう場所なのだ。

100万家族が抱えるひきこもり 人ごとではない“地獄図”

ひきこもり問題はまだ身近な問題になっていない。特別な人という印象を持つ人は多いのではないだろうか。

「ひきこもりの人は百万人と言われています。ひきこもりの人を抱える家庭は地獄図そのものです。ひきこもりの弟が自殺してしまつて、その後『なぜ死んだのか、その意味を悪夢のように堂々めぐりに考えてしまう。地獄の十年だった』といっている人がいます。そういう家族が100万前後家族いると考えると、人ごと、にしてはいられない。けど、人ごとになってしまつてしまふんでしょね」と教授の表情が翳った。

ひきこもりは家族としても隠してしまうことが多い。事件になって報道されると、引きこもりの青年の家をおびえてしまう。100万前後のなかの一人ですから、ひきこもりだという因果関係はないのに、当事者をかかえた家族はますます孤立していつてしまう。そこが恐ろしいところである。



これからもフットワークよく

横湯教授は超多忙だ。学生を指導し、研究するかたわら、相談室を持ちカウンセラーとしても活躍。また虐待防止協会をはじめ様々な活動を精力的に行っている。

研究室は「駆け込み寺」 超多忙の毎日

「私は研究者というより実務家だと思っています。治療論だけで、目の前の人の心のさまを見ているのでは、その人たちが人間としてどう生き抜くかを考えるには足りないと思います。少しフットワークよく、社会との関係で考えていきたいんです。あんまりアカデミックじゃないんです、私」

取材中にも教授に救いを求める電話がかかってきていた。まるで「駆け込み寺」のようだ。これが「日常茶飯事」だという。

「はしか休講で『やった！休める』と思っただくらい忙しいです。プライベートな時間なんてものは少ないですね。めったに研究室には座ってないんですよ。でも今よりも若いころのほうが下手でしたね。一生懸命になりすぎて、歩きながら寝ていたり。このごろは自分の体のメンテナンスをしなきゃいけないと思うようになり

まりました」

そんな横湯教授もはじめからこの道を目指していたわけではなかった。教師になろうと思って最初に勤めた養護学校では、当時若かったこともあり、自分のやったことの成果がすぐ出ないことにいらいらしてしまった、という。

目の前の子供を救いたい すべてが独学

そんな時、国立国府大病院の児童精神科の入院病棟児を対象に全国で初めて、登校拒否の子供たちの学級ができたというので見学に行った。すると何か魅力を感じて、1960年後半、その学校の教師になった。だが、そこでは教育学も心理学も今までしてきた勉強は役に立たなかった。目の前の子供たちに役立つには何をしたらいいかを考えて、欧米の臨床医学の勉強を独学ではじめた。

「恩師はいません。勉強したのは本から。全部独学ですね」

◇ ◇

不登校、いじめ、虐待。まさに地獄のような体験をした人たちと40年間向き合ってきた横湯教授。目の前の子供を救いたい。その思いで、まだまだ走り続ける。